

季語の近代化

－生活の変化と俳句－

松井 貴子

I 明治の改暦と季語の近代化

江戸時代から明治時代に変わり、日本の西洋受容は、限られた先進的な分野だけでなく、人々の日常生活に関わる改変にも及んだ。その一つが、改暦である。江戸時代までは、様々な和暦（太陰太陽暦、太陰暦、陰暦。月の満ち欠けによる。）が使われていた。旧暦は、農業暦としても有効なものであり、人々の日常的な季節感覚に密着していたが、これに対して、明治6年（1873年）から、新暦として太陽暦（グレゴリオ暦）が採用された。明治政府の財政対策という側面もあったが、この改暦の大義名分は、西洋の暦に合わせるといったものであった。明治5年11月に改暦が公表され、旧暦の明治5年12月3日が新暦の明治6年1月1日とされた。通常的生活感覚からすれば、突然の改変に感じられるものであり、人々の生活に混乱が生じた。

このような状況で、俳句の季語も変化せざるを得なくなったのである。

俳句の歳時記では、収録される季語が、四つの季節のいずれかに分類されていたが、新暦の採用により、実感としての季節感に一ヶ月ほどのずれが生じるようになったため、一月初めの二週間ほどの間に使われる季語を分離し、新たに、「新年」という季節区分を独立させた。これにより、例えば、江戸時代の俳諧では、年明けが春の始まりと同時期であったのが、明治時代以降の近現代俳句では一ヶ月ほど後になり、別々の季節のものとして認識されるようになった。

各季節の季語は、それぞれ、時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物に分類される。

時候—季節の名、月の名、寒暖の変化。

天文—季節ごとの気象現象。

地理—季節ごとの山、川、海、湖、野などの様子。

生活—日々の暮らしの中で行われる季節に係した事柄や物。

行事—一日にちや期間が決まっている季節の行事。記念日、節句、忌日（命日）など。

動物—その季節によく見られる動物。特徴的な外見や行動を見せる動物。

植物—その季節に開花、結実する植物。

この区分のなかで、「時候」、「天文」、「地理」に属する季語には、ほとんど変化が見られない。「時候」では、改暦という大きな出来事があったが、時候を表わす言葉そのものは変わっていない。「天文」、「地理」に属するのは、古くから存在している現象、自然物である。地球規模の気候変動、地殻変動によって、その様相が変化することは起こり得るが、それは、人間の寿命に比べて、はるかに長いスパンでとらえられるものであり、人の力で自在に制御できるものではない。人為的に変化を加えること、新たなものを作り出すこと、それらを生活のなかに定着させることが、現時点では、まだまだ難しいものである。これらについて、起こり得る変化としては、旧来の季語が包含していた本意、本情、伝統的に継承されてきた文学的意味に、新たな内容が加えられるということが考えられる。

これに対して、「生活」、「行事」の区分では、新しい季語が増えている。近代化の流れのなかで、西洋由来のものが、日常生活に入ってきたことによる変化である。「動物」、「植物」の区分にも、「生活」、「行事」ほど多くはないが、新規の季語として、取り入れられたものがある。

近代の新しい季語が出てきた背景には、まず、明治政府が主導した制度の創設、改変がある。国家有用の人材を育成するために、西洋に倣った近代的な教育制度が作られ、義務教育として学校に通うことになった。そして、富国強兵、殖産興業

政策のもとに、産業の近代化が進められ、工業化が進展した。こうして、他者に雇用される労働者が出現して、政府の役人、軍隊に入る者、都市に住む俸給生活者などが、西洋風の生活スタイルを身につけ、日常生活の衣食住に浸透させていった。また、江戸時代以来の禁教令が解かれたことで、キリスト教の行事が行われるようになり、認知されて、季語になっている。他には、明治時代以降に活躍した文学者（俳人、小説家）の命日が忌日として季語になったものがあり、太平洋戦争後に制定された祝日もまた季語となった。それから、明治時代以降に日本に輸入されて、飼育、栽培されるようになって普及した動植物で季語になったものがある。

近現代俳句で季語となったものとして、次のような季語を例示することができる。¹

春／生活²

試験 春闘 卒業 入学 種痘 遠足 春ショール 春日傘 春暖炉 暖炉納む ポートレース 石罨玉 鞆 復活祭 茂吉忌 鳴雪忌 三鬼忌 虚子忌 啄木忌

春／行事³

建国記念日 天皇誕生日 ゴールデン・ウィーク メーデー 憲法記念日 四月馬鹿 緑の週間 バレンタイン・デー 受難節 聖金曜日

春／植物⁴

ライラック 勿忘草 フリージア アネモネ シネラリア チューリップ ヘリオトロープ シクラメン

夏／生活⁵

夏休 暑中見舞 帰省 夏期講習会 林間学校 夏服（白服） 夏シャツ 水着 サングラス 夏帽子 夏手袋 白靴 ビール ラムネ ソーダ水 サイダー アイスクリーム 苺ミルク ハンモック 香水 冷房 冷蔵庫 扇風機 日傘 散水車 避暑 ポート ヨット キャンプ プール 海水浴 砂日傘 ナイター

夏／行事⁶

子供の日 母の日 父の日 愛鳥週間 時の記念日 パリ祭 万太郎忌 四迷忌 たかし忌 多佳子忌 桜桃忌 茅舎忌 河童忌 露伴忌

夏／動物⁷

熱帯魚

夏／植物⁸

薔薇 バナナ パイナップル グラジオラス（唐菖蒲、和欄菖蒲） ダリア（天竺牡丹） カーネーション メロン

秋／生活⁹

休暇明 運動会 夜学

秋／行事¹⁰

原爆忌 終戦記念日 震災記念日 敬老の日 赤い羽根 文化の日 水巴忌 鬼城忌 露伴忌 子規忌 蛇笏忌

秋／植物¹¹

林檎（西洋リンゴ） 檸檬 カンナ コスモス

冬／生活¹²

ボーナス 社会鍋 冬休 冬服 冬シャツ セーター カーディガン ジャケツ（ジャケット） 外套 コート マント 冬帽 ショール（肩掛） マフラー（襟巻） マッフ マスク 毛糸編む 牛鍋 冬館 暖房 ストーブ ペーチカ 吸入器 フレーム（温室） 捕鯨 砕氷船 避寒 青写真 スキー スケート ラグビー

冬／行事¹³

勤労感謝の日 クリスマス 亜浪忌 波郷忌 一葉忌 漱石忌 横光忌 一碧楼忌 寅彦忌

冬／植物¹⁴

室咲 冬薔薇 冬林檎（西洋リンゴ） ポインセチア

新年／生活¹⁵

名刺受 賀状 初電話 初写真 初飛行 学校始

新年／行事¹⁶

成人の日 初弥撒 乙字忌 草城忌

これらの季語が出てきた背景には次のようなことが考えられるであろう。

近代の教育制度の成立と学校教育の普及 産業の近代化、工業化による労働者、給与所得者の増加

西洋風の生活スタイルを導入した衣食住の定着

キリスト教に由来する行事の浸透
 近現代の文学者の忌日（命日）
 太平洋戦争後に制定された祝日
 江戸時代から明治時代に日本に輸入、栽培されるようになり、明治時代以降に一般に普及した動植物

季語は、国家レベルでの大きな改変、歴史的な変化の影響を受け、また、それによって生じてくる、人々の生活にかかわる個々の事物の変化に影響を受けて、時代とともに変化している。

Ⅱ 季語と俳句作品の変化

季語が変化するのに応じて、作られる作品にも変化が生じた。西洋受容による生活文化の変化が、大きな影響を与えている。そのような大きな変化の動きの中にあっても、変化せず、存在し続けているように見えるものもあるが、近代化の影響と全く無縁であり続けたわけではなかった。動植物については、人為的に変化が起こされたものが、俳句に影響している。

1 西洋受容によって変わるもの

近代日本となった明治時代に、新たな物事を取り入れられたことにより、新たに季語となるものが出てきて、季語が増加した。それは、主に、生活、行事に分類される季語になっている。そのような季語を使って作られたのが、以下の例句である。

春 生活／

卒業のひとり横向く写真かな 大橋桜坡子¹⁷
 それぞれの鉛筆の角度試験 貴子

春 行事／

離婚すと本音も少し四月馬鹿 奥田真弓¹⁸
 紅茶熱しバレンタインの日と思う 金堂淑子¹⁹
 茂吉選にわが一首あり茂吉の忌 池上浩山人²⁰
 若き頃嫌ひし虚子の忌なりけり 猪狩哲郎²¹
 啄木忌いくたび職を替へてもや 安住敦²²
 靴裏に都会は固し啄木忌 秋元不死男²³

夏 生活／

夏休みも半ばの雨となりにけり 安住敦²⁴
 爪染めて夏期大学に馳せ参ず 吉村千秋²⁵
 水着買ふ洗濯してみるとりあへず 貴子

サングラスおのれの弱さひたかくす 安田建司²⁶
 白靴を踏まれしほどの一些事か 安住敦²⁷
 ビヤガーデン照明青き城望む 佐野まもる²⁸
 ラムネ球鳴り生涯の詩成らず 宮武寒々²⁹
 ソーダ水話のこりのあるやうな 下田実花³⁰
 サイダー売一日海に背を向けて 波止影夫³¹
 アイスクリームなめてかなしき話きく

岩崎富久子³²

香水の一滴づつにかくも減る 山口波津女³³
 全館冷房紙の薄さの蒲焼に 沢木欣一³⁴
 音絶えず眠れざる夜の冷蔵庫 青木綾子³⁵
 扇風機とまり静かな目に没日 加藤楸邨³⁶
 ピストルがプールの硬き面にひびき 山口誓子³⁷

夏 行事／

東京のきれいなことば子供の日 西本一都³⁸
 母ありといふなしといふ母の日に 小坂順子³⁹
 父の日の若き遺影を父と呼ぶ 山田孝子⁴⁰
 巴里祭モデルと画家の夫婦老い 中村伸郎⁴¹
 四迷忌や借りて重ねし書少し 石田波郷⁴²
 夜に務め車中立ち読む桜桃忌 南部博⁴³
 餓鬼忌は又我誕生日菓子を食べ 中村草田男⁴⁴

秋 生活／

友死すと揭示してあり休暇明 上村占魚⁴⁵
 休暇明け洪茶五杯で会議果つ 貴子
 運動会どこかにあつて風に聞ゆ 稲葉緑風⁴⁶
 夜学生麵麩買ふ大き闇負ひて 森本柿郷⁴⁷

秋 行事／終戦記念日ビルへ出前のそばすゝる

島田不拘⁴⁸

江東にまた帰り住み震災忌 大橋越央子⁴⁹
 十二時に十二時打ちぬ震災忌 遠藤梧逸⁵⁰
 歯を借りて縋帯むすぶ子規忌かな 秋元不死男⁵¹

冬 生活／

懐にボーナスありて談笑す 日野草城⁵²
 街に出て生徒に会ひぬ冬休 藤岡筑邨⁵³
 セーターに枯葉一片旅さむし 加藤楸邨⁵⁴
 コート脱ぎ現れいづる晴着かな 高浜虚子⁵⁵
 スキー帽かぶり糠味噌かき廻す 菖蒲あや⁵⁶
 スケートの紐むすぶ間も逸りつつ 山口誓子⁵⁷
 ラガー等のそのかちうたのみじかけれ

横山白虹⁵⁸

冬 行事／

へろへろとワントンすするクリスマス

秋元不死男⁵⁹

屋台とは聖夜に背向け酔ふところ 佐野まもる⁶⁰

研ぎ水の濁りを見つむ一葉忌 貴子

ぬかるみをよけて猫来る漱石忌 石山耶舟⁶¹

新年 生活／

鳩古舎に学校始の日はぬくし 小川千賀⁶²

初電話巴里よりと聞き椅子を立つ 水原秋桜子⁶³

初写真長幼序あり一家庭 伊藤松宇⁶⁴

初飛行つづく裏富士雲を見ず 飯田蛇笏⁶⁵

新年 行事／

色あふれ成人の日の昇降機 斉藤道子⁶⁶

初ミサを聴くぬるき炬燵に顔のせて 西垣脩⁶⁷

雨の音に覚めてしづかな草城忌 横山白虹⁶⁸

2 変わらず存在し続けるもの

近代化をめざした西洋受容によって、大きく変化したものがある一方で、前近代から、引き継がれたものもある。それらは、そのもの自体に大きな変化が生じることはなかったものである。しかし、それでも、歴史的な時代変化の中で、部分的であっても、新たなものが付加され、折衷されることを、完全には避けられず、これによって、それまでとは異なる様相を呈することは起こり得た。俳句では、一句の中で、新奇に取り合わせられたものが、伝統的な本意を拡大し、変容をもたらしることが起こり得るという状況になったということである。このような変化は、主に、時候、天文に分類される季語に見られる。

春 時候／

バスを待ち大路の春をうたがはず 石田波郷⁶⁹

春浅く火酒したたらす紅茶かな 杉田久女⁷⁰

三月やモナリザを売るいしだたみ 秋元不死男⁷¹

花冷のわが運ばる、電車かな 星野立子⁷²

春深き月光触るる椅子にあり 中島斌雄⁷³

ゴッホの星八十八夜の木々の間に 相馬遷子⁷⁴

春 天文／

春日を鉄骨のなかに見て帰る 山口誓子⁷⁵

電柱が今建ち春の雲集ふ 西東三鬼⁷⁶

春一番プール底より鴉たつ 藤野基一⁷⁷

青麦にオイルスタンド轟る中 富安風生⁷⁸

みちのくの古き教会雪の果 福田蓼汀⁷⁹

かげろふに消防車解体中も赤 西東三鬼⁸⁰

春 地理／

電灯をあるだけ灯す春野来て 芝崎佐田男⁸¹

焼山の闇濡らす雨駅を籠め 宮崎昭彦⁸²

東京の中の葛西の春田かな 久保田万太郎⁸³

雪解けの雫が無数ピアノ初歩 堀内薫⁸⁴

春園のホースむくむく水通る 西東三鬼⁸⁵

鉛筆を落せば立ちぬ春の土 高浜虚子⁸⁶

夏 時候／

夏も肌かくす和服に慣れ暮らす 山口波津女⁸⁷

初夏に開く郵便切手ほどの窓 有馬朗人⁸⁸

汽罐車の煙鋭き夏は来ぬ 山口誓子⁸⁹

週末の牧師旅にあり麦の秋 山口青邨⁹⁰

麦秋や書架にあまりし文庫本 安住敦⁹¹

珈琲や夏のゆふぐれながかりき 日野草城⁹²

ジャムに封ピクルスに封夏終る 三宅絹子⁹³

夏 天文／

なほ北に行く汽車とまり夏の月 中村汀女⁹⁴

青あらし電車の音と家に来る 山口誓子⁹⁵

温室はメロンを作る夏の雨 山口青邨⁹⁶

さみだるる心電車をやり過す 中村汀女⁹⁷

虹が出るあゝ鼻先に軍艦 秋元不死男⁹⁸

修道女の大き手提や梅雨晴間 近藤愛子⁹⁹

牛乳煮るやラヂオの小鳥朝焼に 石橋秀野¹⁰⁰

夏 地理／

イザヤ書の語や凜々と遠青嶺 大谷利彦¹⁰¹

七月の青嶺まちかく溶鋳炉 山口誓子¹⁰²

セロリ噛み青野の椅子に深く沈む 中島秀子¹⁰³

青野ゆく空のマッチを捨てきれず 岸本真紀郎¹⁰⁴

野の青に置く硬質の管楽器 黒田燎¹⁰⁵

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る 山口誓子¹⁰⁶

土用波胸の十字架炎々と 加藤知世子¹⁰⁷

秋 時候／

秋立つやこつこつと越す跨線橋 大野林火¹⁰⁸

けつまづくピエロ秋めく裏通り 笹岡峠¹⁰⁹

甦る学校町の九月かな 竹田哲¹¹⁰

八朔や遠き記憶のいくさの日 成瀬桜桃子¹¹¹

晩秋の貨車にこくりと馬の首 原コウ子¹¹²

マンホールの底より声す秋の暮 加藤楸邨¹¹³

ミシン踏みまた爽やかにミシン踏む 洪沢秀雄¹¹⁴

ポストまで百歩ばかりのそぞろ寒 竹内しげ¹¹⁵

来ぬバスを待つも一人や暮の秋 北岡文字¹¹⁶

秋 天文／

戦死報秋の日くれてきたりけり 飯田蛇笏¹¹⁷

秋晴の運動会をしてゐるよ 富安風生¹¹⁸
 秋空へ大きな硝子窓一つ 星野立子¹¹⁹
 会議終ふ無月の椅子のさまざまに 鴫田日出夫¹²⁰
 子のこのみ今シューベルト星月夜 京極杞陽¹²¹
 銀河より聞かむエホバのひとりごと

阿波野青畝¹²²

ラヂオつと消され秋風残りけり 星野立子¹²³
 ひもじきとき鉄の匂ひの秋の風 山口誓子¹²⁴
 颱風に吹かれ吹かれて投函す 石田波郷¹²⁵
 踏切の燈にあつまれる秋の雨 山口誓子¹²⁶
 秋雨や赤鉛筆で速達と 星野立子¹²⁷
 露けさの弥撒のをはりはひざまづく

水原秋桜子¹²⁸

秋 地理／

秋郊の葛の葉といふ小さき駅 川端茅舎¹²⁹
 刈田昏れ角力放送持ちあるく 秋元不死男¹³⁰
 踏切を流れ退く秋出水 橋本多佳子¹³¹

冬 時候／

跳箱の突き手一瞬冬が来る 友岡子郷¹³²
 霜月や手燭の翳のマリア像 倉田春名¹³³
 ポケットの胡桃鳴らして年を越す 加藤楸邨¹³⁴
 校正の赤きペンもつ寒の入 山口青邨¹³⁵
 ひかる鉄路冬のゆふべを貫けり 山口誓子¹³⁶
 冬ふかし朝は煤降る映画街 金子潮¹³⁷

冬 天文／

冬晴のプール四角に空うつす 上林白草居¹³⁸
 電柱の影が田に伸び冬早 広瀬直人¹³⁹
 凍て空に声を残して移民発つ 五十嵐播水¹⁴⁰
 煙突と冬三日月と相寄りし 岸風三楼¹⁴¹
 木がらしや東京の日のありどころ 芥川龍之介¹⁴²
 パン種の生きてふくらむ夜の霜 加藤楸邨¹⁴³
 外套の裏は緋なりき明治の春 山口青邨¹⁴⁴
 雪片と耶蘇名ルカとを身に着けし 平畑静塔¹⁴⁵
 鎌倉と話す電話や吹雪をり 池内たけし¹⁴⁶
 冬夕焼ネオンがさきに夜創る 長岐靖朗¹⁴⁷

冬 地理／

汽車とまり遠き雪嶺とまりたり 山口誓子¹⁴⁸
 汽車全く雪原に入り人黙る 西東三鬼¹⁴⁹
 わが汽車の汽罐車見えて枯野行く 山口波津女¹⁵⁰
 ライターの火がポポポポと滝涸る、
 秋元不死男¹⁵¹
 凍港や旧露の街はありとのみ 山口誓子¹⁵²
 ロシア見ゆ洋酒につらら折り入れて

平井さち子¹⁵³

凍港や天主の鐘の夕告ぐる 堀端葛花¹⁵⁴

新年 地理／

雪嶺とスケートの子の初景色 相馬遷子¹⁵⁵

3 人為の変更

明治時代以降は、江戸時代のような、人と物の移動の制限が緩められている。そのため、人間によって意図的に移入された動植物が、人々の日常生活で広がるとともに、新たな季語として定着している。それらの季語は、主に、動物、植物に分類される。

春 植物／

真昼間の夢の花かもライラック 石塚友二¹⁵⁶
 勿忘草わかもの、墓標ばかりなり 石田波郷¹⁵⁷
 熱高く睡るフリージャの香の中に 古賀まり子¹⁵⁸
 アネモネのむらさき面会謝絶中 石田波郷¹⁵⁹
 チューリップの花には侏儒が棲むと思ふ

松本たかし¹⁶⁰

敷く雪の中に春置くヒヤシンス 水原秋桜子¹⁶¹

夏 動物／

熱帯魚見て水深を感じをり 後藤夜半¹⁶²

夏 植物／

バナナの香フルーツパーラー昼暗く

松本たかし¹⁶³

パイナップル一つ挽ぐ間の通り雨 谷亜紀¹⁶⁴
 老神父カーネーションを持ち散歩 星野立子¹⁶⁵
 屋上にサルビヤ炎えて新聞社 広瀬一朗¹⁶⁶
 籐椅子にペルシャ猫をるメロンかな 富安風生¹⁶⁷

秋 植物／

一頁のこしカンナの駅に着く 山田桂三¹⁶⁸
 コスモスの押し寄せてゐる厨口 清崎敏郎¹⁶⁹

冬 植物／

ポインセチアや聖書は黒き表紙かな 三宅絹子¹⁷⁰

おわりに

前近代から引き継がれてきた季語、古典文学の伝統を継承する季語は、歴史的に豊かな内容を含んでいる。一語で、作品世界を大きくも深くもする効果がある。それに対して、新しく季語になったものには、文学的な伝統は蓄積されていない。そして、例句も少ないため、その季語の本意が確

立するのには時間がかかる。それでも、歳時記に新しい季語が加えられてきたのは、俳句が、発句であった俳諧の時代から、文学的伝統を引きつつ、新奇さのある作品が求められ、評価されてきたからであろう。

近代俳句の特質は、作者の実感を重視することにある。個人の生活様式や日常的な感覚が、作品の創作においても、鑑賞においても、大きく影響する。季語の近代化は、日本人の生活を大きく変えた近代化の動きに呼応し、近代俳句を特徴づけるものとなっている。

¹ 歳時記は、膨大な種類が刊行されている。本稿では、特に季語の本意が説明されていて、現代俳人の俳句創作において最も有益であると思われる歳時記を選択した。

² 平井照敏編『新歳時記（春）』67 - 151 頁

³ 平井照敏編『新歳時記（春）』152 - 221 頁

⁴ 平井照敏編『新歳時記（春）』275 - 394 頁

⁵ 平井照敏編『新歳時記（夏）』66 - 212 頁

⁶ 平井照敏編『新歳時記（夏）』213 - 252 頁

⁷ 平井照敏編『新歳時記（夏）』253 - 347 頁

⁸ 平井照敏編『新歳時記（夏）』348 - 519 頁

⁹ 平井照敏編『新歳時記（秋）』81 - 147 頁

¹⁰ 平井照敏編『新歳時記（秋）』148 - 191 頁

¹¹ 平井照敏編『新歳時記（秋）』248 - 390 頁

¹² 平井照敏編『新歳時記（冬）』91 - 272 頁

¹³ 平井照敏編『新歳時記（冬）』273 - 314 頁

¹⁴ 平井照敏編『新歳時記（冬）』357 - 404 頁

¹⁵ 平井照敏編『新歳時記（新年）』37 - 135 頁

¹⁶ 平井照敏編『新歳時記（新年）』136 - 191 頁

¹⁷ 平井照敏編『新歳時記（春）』70 頁

¹⁸ 平井照敏編『新歳時記（春）』173 頁

¹⁹ 平井照敏編『新歳時記（春）』210 頁

²⁰ 平井照敏編『新歳時記（春）』217 頁

²¹ 平井照敏編『新歳時記（春）』220 頁

²² 平井照敏編『新歳時記（春）』220 頁

²³ 平井照敏編『新歳時記（春）』220 頁

²⁴ 平井照敏編『新歳時記（夏）』67 頁

²⁵ 平井照敏編『新歳時記（夏）』68 頁

²⁶ 平井照敏編『新歳時記（夏）』80 頁

²⁷ 平井照敏編『新歳時記（夏）』83 頁

²⁸ 平井照敏編『新歳時記（夏）』96 頁

²⁹ 平井照敏編『新歳時記（夏）』102 頁

³⁰ 平井照敏編『新歳時記（夏）』102 頁

³¹ 平井照敏編『新歳時記（夏）』103 頁

³² 平井照敏編『新歳時記（夏）』104 頁

³³ 平井照敏編『新歳時記（夏）』131 頁

³⁴ 平井照敏編『新歳時記（夏）』134 頁

³⁵ 平井照敏編『新歳時記（夏）』135 頁

³⁶ 平井照敏編『新歳時記（夏）』137 頁

³⁷ 平井照敏編『新歳時記（夏）』182 頁

³⁸ 平井照敏編『新歳時記（夏）』213 頁

³⁹ 平井照敏編『新歳時記（夏）』214 頁

⁴⁰ 平井照敏編『新歳時記（夏）』215 頁

⁴¹ 平井照敏編『新歳時記（夏）』217 頁

⁴² 平井照敏編『新歳時記（夏）』246 頁

⁴³ 平井照敏編『新歳時記（夏）』250 頁

⁴⁴ 平井照敏編『新歳時記（夏）』251 頁

⁴⁵ 平井照敏編『新歳時記（秋）』81 頁

⁴⁶ 平井照敏編『新歳時記（秋）』82 頁

⁴⁷ 平井照敏編『新歳時記（秋）』82 頁

⁴⁸ 平井照敏編『新歳時記（秋）』149 頁

⁴⁹ 平井照敏編『新歳時記（秋）』150 頁

⁵⁰ 平井照敏編『新歳時記（秋）』150 頁

⁵¹ 平井照敏編『新歳時記（秋）』190 頁

⁵² 平井照敏編『新歳時記（冬）』92 頁

⁵³ 平井照敏編『新歳時記（冬）』109 頁

⁵⁴ 平井照敏編『新歳時記（冬）』125 頁

⁵⁵ 平井照敏編『新歳時記（冬）』128 頁

⁵⁶ 平井照敏編『新歳時記（冬）』261 頁

⁵⁷ 平井照敏編『新歳時記（冬）』261 頁

⁵⁸ 平井照敏編『新歳時記（冬）』262 頁

⁵⁹ 平井照敏編『新歳時記（冬）』297 頁

⁶⁰ 平井照敏編『新歳時記（冬）』297 頁

⁶¹ 平井照敏編『新歳時記（冬）』311 頁

⁶² 平井照敏編『新歳時記（新年）』87 頁

⁶³ 平井照敏編『新歳時記（新年）』70 頁

⁶⁴ 平井照敏編『新歳時記（新年）』72 頁

⁶⁵ 平井照敏編『新歳時記（新年）』84 頁

⁶⁶ 平井照敏編『新歳時記（新年）』184 頁

⁶⁷ 平井照敏編『新歳時記（新年）』187 頁

⁶⁸ 平井照敏編『新歳時記（新年）』191 頁

⁶⁹ 平井照敏編『新歳時記（春）』8 頁

⁷⁰ 平井照敏編『新歳時記（春）』11 頁

⁷¹ 平井照敏編『新歳時記（春）』15 頁

⁷² 平井照敏編『新歳時記（春）』26 頁

⁷³ 平井照敏編『新歳時記（春）』28 頁

⁷⁴ 平井照敏編『新歳時記（春）』28 頁

⁷⁵ 平井照敏編『新歳時記（春）』32 頁

⁷⁶ 平井照敏編『新歳時記（春）』33 頁

⁷⁷ 平井照敏編『新歳時記（春）』39 頁

⁷⁸ 平井照敏編『新歳時記（春）』41 頁

⁷⁹ 平井照敏編『新歳時記（春）』47 頁

⁸⁰ 平井照敏編『新歳時記（春）』50 頁

⁸¹ 平井照敏編『新歳時記（春）』54 頁

⁸² 平井照敏編『新歳時記（春）』55 頁

⁸³ 平井照敏編『新歳時記（春）』59 頁

⁸⁴ 平井照敏編『新歳時記（春）』62 頁

⁸⁵ 平井照敏編『新歳時記（春）』66 頁

⁸⁶ 平井照敏編『新歳時記（春）』66 頁

⁸⁷ 平井照敏編『新歳時記（夏）』8 頁

⁸⁸ 平井照敏編『新歳時記（夏）』9 頁

⁸⁹ 平井照敏編『新歳時記（夏）』11 頁

⁹⁰ 平井照敏編『新歳時記（夏）』13 頁

⁹¹ 平井照敏編『新歳時記（夏）』13 頁

⁹² 平井照敏編『新歳時記（夏）』20 頁

⁹³ 平井照敏編『新歳時記（夏）』28 頁

⁹⁴ 平井照敏編『新歳時記（夏）』33 頁

⁹⁵ 平井照敏編『新歳時記（夏）』36 頁

⁹⁶ 平井照敏編『新歳時記（夏）』38 頁

⁹⁷ 平井照敏編『新歳時記（夏）』41 頁

- 98 平井照敏編『新歳時記 (夏)』45 頁
 99 平井照敏編『新歳時記 (夏)』47 頁
 100 平井照敏編『新歳時記 (夏)』49 頁
 101 平井照敏編『新歳時記 (夏)』54 頁
 102 平井照敏編『新歳時記 (夏)』54 頁
 103 平井照敏編『新歳時記 (夏)』57 頁
 104 平井照敏編『新歳時記 (夏)』57 頁
 105 平井照敏編『新歳時記 (夏)』57 頁
 106 平井照敏編『新歳時記 (夏)』57 頁
 107 平井照敏編『新歳時記 (夏)』59 頁
 108 平井照敏編『新歳時記 (秋)』12 頁
 109 平井照敏編『新歳時記 (秋)』14 頁
 110 平井照敏編『新歳時記 (秋)』17 頁
 111 平井照敏編『新歳時記 (秋)』18 頁
 112 平井照敏編『新歳時記 (秋)』19 頁
 113 平井照敏編『新歳時記 (秋)』22 頁
 114 平井照敏編『新歳時記 (秋)』26 頁
 115 平井照敏編『新歳時記 (秋)』29 頁
 116 平井照敏編『新歳時記 (秋)』33 頁
 117 平井照敏編『新歳時記 (秋)』37 頁
 118 平井照敏編『新歳時記 (秋)』38 頁
 119 平井照敏編『新歳時記 (秋)』40 頁
 120 平井照敏編『新歳時記 (秋)』49 頁
 121 平井照敏編『新歳時記 (秋)』55 頁
 122 平井照敏編『新歳時記 (秋)』56 頁
 123 平井照敏編『新歳時記 (秋)』58 頁
 124 平井照敏編『新歳時記 (秋)』58 頁
 125 平井照敏編『新歳時記 (秋)』61 頁
 126 平井照敏編『新歳時記 (秋)』63 頁
 127 平井照敏編『新歳時記 (秋)』63 頁
 128 平井照敏編『新歳時記 (秋)』68 頁
 129 平井照敏編『新歳時記 (秋)』72 頁
 130 平井照敏編『新歳時記 (秋)』74 頁
 131 平井照敏編『新歳時記 (秋)』77 頁
 132 平井照敏編『新歳時記 (冬)』12 頁
 133 平井照敏編『新歳時記 (冬)』15 頁
 134 平井照敏編『新歳時記 (冬)』21 頁
 135 平井照敏編『新歳時記 (冬)』23 頁
 136 平井照敏編『新歳時記 (冬)』27 頁
 137 平井照敏編『新歳時記 (冬)』35 頁
 138 平井照敏編『新歳時記 (冬)』41 頁
 139 平井照敏編『新歳時記 (冬)』41 頁
 140 平井照敏編『新歳時記 (冬)』42 頁
 141 平井照敏編『新歳時記 (冬)』44 頁
 142 平井照敏編『新歳時記 (冬)』47 頁
 143 平井照敏編『新歳時記 (冬)』59 頁
 144 平井照敏編『新歳時記 (冬)』63 頁
 145 平井照敏編『新歳時記 (冬)』64 頁
 146 平井照敏編『新歳時記 (冬)』67 頁
 147 平井照敏編『新歳時記 (冬)』72 頁
 148 平井照敏編『新歳時記 (冬)』74 頁
 149 平井照敏編『新歳時記 (冬)』76 頁
 150 平井照敏編『新歳時記 (冬)』77 頁
 151 平井照敏編『新歳時記 (冬)』79 頁
 152 平井照敏編『新歳時記 (冬)』86 頁
 153 平井照敏編『新歳時記 (冬)』86 頁
 154 平井照敏編『新歳時記 (冬)』88 頁
 155 平井照敏編『新歳時記 (新年)』35 頁
 156 平井照敏編『新歳時記 (春)』293 頁

- 157 平井照敏編『新歳時記 (春)』331 頁
 158 平井照敏編『新歳時記 (春)』332 頁
 159 平井照敏編『新歳時記 (春)』332 頁
 160 平井照敏編『新歳時記 (春)』334 頁
 161 平井照敏編『新歳時記 (春)』335 頁
 162 平井照敏編『新歳時記 (夏)』289 頁
 163 平井照敏編『新歳時記 (夏)』375 頁
 164 平井照敏編『新歳時記 (夏)』376 頁
 165 平井照敏編『新歳時記 (夏)』422 頁
 166 平井照敏編『新歳時記 (夏)』428 頁
 167 平井照敏編『新歳時記 (夏)』453 頁
 168 平井照敏編『新歳時記 (秋)』307 頁
 169 平井照敏編『新歳時記 (秋)』312 頁
 170 平井照敏編『新歳時記 (冬)』384 頁

参考文献

- 長谷川權「歳時記の時間」橋本毅彦・栗山茂久
 編著『遅刻の誕生－近代日本における時間意識の形成』2001・8 三元社 241－265 頁
 宮坂静生 岩波新書 1214『季語の誕生』2009・
 10 岩波書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 春』1973・4
 初版、1977・10 7版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 夏』1973・7
 初版、1977・10 7版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 秋』1973・9
 初版、1978・2 6版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 冬』1973・
 10、1977・10 6版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 新年』1973・
 11、1978・2 5版 角川書店
 飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修『カ
 ラー版新日本歳時記 春』2000・2 講談社
 飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修『カ
 ラー版新日本歳時記 夏』2000・4 講談社
 飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修『カ
 ラー版新日本歳時記 秋』1999・10 講談社
 飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修『カ
 ラー版新日本歳時記 冬』1999・12 講談社
 飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修『カ
 ラー版新日本歳時記 新年』2000・6 講談
 社
 飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修『カ
 ラー版新日本歳時記 愛蔵版』2008・10
 講談社

- 角川学芸出版編『角川俳句大歳時記 冬』2006・
9 初版、2009・12 三版 角川学芸出版
- 角川学芸出版編『角川俳句大歳時記 秋』2006・
7 初版、2009・4 三版 角川学芸出版
- 角川学芸出版編『角川俳句大歳時記 夏』2006・
5 初版 角川学芸出版
- 角川学芸出版編『角川俳句大歳時記 春』2006・
12 初版、2008・3 三版 角川学芸出版
- 角川学芸出版編『角川俳句大歳時記 新年』
2006・11 初版、2007・2 再版 角川学芸出版
- 有馬朗人・宇多喜代子・金子兜太・廣瀬直人監修、
松田ひろむ編『ザ・俳句十万人歳時記<春>』
2008・4 第三書館
- 有馬朗人・宇多喜代子・金子兜太・廣瀬直人監修、
松田ひろむ編『ザ・俳句十万人歳時記<夏>』
2008・8 第三書館
- 有馬朗人・宇多喜代子・金子兜太・廣瀬直人監修、
松田ひろむ編『ザ・俳句十万人歳時記<秋>』
2008・11 第三書館
- 有馬朗人・宇多喜代子・金子兜太・廣瀬直人監修、
松田ひろむ編『ザ・俳句十万人歳時記<冬>』
2009・12 第三書館
- 有馬朗人・宇多喜代子・金子兜太・廣瀬直人監修、
松田ひろむ編『ザ・俳句十万人歳時記<新年
>』2012・1 第三書館
- 有馬朗人・金子兜太・廣瀬直人監修、ザ・俳句歳
時記編集委員会編『ザ・俳句歳時記』2006・
6 初版、2006・3 第三版 第三書館
- 平井照敏編『新歳時記（春）』1989・3、1996・12
改訂版 河出書房新社
- 平井照敏編『新歳時記（夏）』1989・6、1996・12
改訂版 河出書房新社
- 平井照敏編『新歳時記（秋）』1989・8、1996・12
改訂版 河出書房新社
- 平井照敏編『新歳時記（冬）』1989・10 初版、
1996・12 改訂版 河出書房新社
- 平井照敏編『新歳時記（新年）』1990・1 初版、
1996・12 改訂版 河出書房新社
- 加藤楸邨・大谷徳藏・井本農一監修、尾形侑・草
間時彦・島津忠夫・大岡信・森川昭編『俳文
学大辞典』1995・10 角川書店

Seasonal words in modernized Japan: Changing Lifestyles and Haiku

MATSUI Takako

Abstract

In the latter half of the 19th century, the Empire of Japan government urged changing the lunisolar calendar into the solar calendar of Western people. Though the Edo period haiku used a lunar calendar of four seasons, the haiku of the Meiji era began to use the new calendar of five divisions or four seasons and a new year to correct the deviation from the actual season. While the acceptance of things Western for modernization significantly changed things, other things inherited from pre-modern times continue to exist.

The seven classifications of seasonal words in *Saijiki*, the almanac of those words are time, weather, astronomical phenomena, geography, life, events, animals, and plants. In modern Japan, new things were introduced, which led to new seasonal words, and the number of them increased. They belonged to life and events. While things changed with the acceptance of the West for modernization, other things retained the legacy of the preceding modern era in the historical changes. Even though these things did not change, people could change how they watched them. Such changes could be seen mainly in the seasonal words classified as weather and astronomy. In the Meiji Era, the government removed the restrictions on the movement of people and goods in the Edo Era. As a result, plants and animals were imported and established as new seasonal terms. These seasonal words belong to animals and plants.

Seasonal expressions have changed over time, influenced by the changes at the national level. Such historical changes still affect people's lives. Modern haiku emphasizes the author's sense of reality. Personal lifestyles and everyday sensibilities have a significant influence on both the creation and the appreciation of the work. The modernization of seasonal words is a characteristic of modern haiku in response to the modernization movement that has drastically changed the lives of Japanese people.

(2022年10月25日受理)